

鈴木祐之輔さんの思い出

2016年5月15日

赤石 隆

本日「祐幸」船長、鈴木祐之輔さんの散骨が執り行われました。
私がヨットを始めて間もない頃、金さんとダブルハンドで親潮北上レースに参加した時のこと、他艇が強風の中気仙沼に午後7時までには到着する中、我が艇（ヤマハ30S）は午前2時にたどり着き、死んだように眠ったあと、その日は船で1泊する事にしておりますと、午後に祐之輔さんのヤマハ30Cが静かに気仙沼港に入ってきました。レースでしゃかりきになって、ごたごたに疲れた我々と違って、祐幸は、出島に一泊、のんびりとやって来たとのこと。私の船にノックがあり、「君たちとはまだ話した事が無かったね。」と言ってご自分の船に私と金さんを招待して下さいました。船内は良く整頓され、俳人の庵のような質素なキャビンの中で、淡々とお話は続けました。経験の浅い私と違って、祐之輔さんは航海長として世界中を巡った船乗りの経験をお持ちで、その中で印象に残った言葉は

「親潮ってのはね、色が独特なんだよ。鉛の様な鈍い感じでね。」

何せ私と金さんが網地島の外側を回って金華山を抜けたのが夕暮れ時でしたから鉛色も何もあったものではありません。でも、その後三陸沖を航海するたびに、本当に鉛色なんだと、あの時をいつも思い出すのです。

船舶同士、海岸局との交信の大切さを深く理解され、無線局「宮城外洋」の運営に力を注いで頂きました。いつまでたっても素人っぽさの抜けない私にとっての永遠のオールドソルト、七ヶ浜沖の海で千の風になってヨット仲間を見守って下さい。